1　哲学とはなにか

――〔質問者〕この対話を、いくつかのとても一般的な問いから始めたいと思います。あなたにとって、あるいはあなたの考えにしたがえば、哲学とはなにであるのでしょうか、そしてなぜ哲学なのでしょうか。

アラン・バディウ　そうですね、まずは個人的な答えを述べたあとで一般的な答えを述べ

ることにしましょう。というのも、わたしにとって哲学とは一つの出会い、つまりは師との出会いであるからです。哲学は、哲学者という人物像といまだなお深く結びついているとわたしは考えています。ところでラカンは、哲学は師の言説の側にあると言っていました。これは褒め言葉ではありませんでしたが、わたしは、この言葉を引き受けています。この言葉がわたしを悩ませることはありませんでした。わたしがまだずっと若かったとき――十六歳か十七歳でした――、わたしはサルトルを読んで圧倒され、大きく変えられました。したがって主観的には、哲学とは、なによりもまず、わたしが従いたいと思う示唆があり、その帰結を展開させたいと思うようなタイプの言説との出会いでした。

なぜならこのタイプの言説は、主体の実在[1]をそれとして直接扱うという特徴をもった言説であるというのがその理由です。それはその主体に教えられるようなにかではありません。その主体による世界の見方を変えたり、善い行為と悪い行為を区別したり、そういったことがらを目的としたなにものかなのです。この観点からすれば、哲学者という人物像が存在するのですから、哲学は一般的言説ではありません。それは、主体的、あるいは主体化されていると同時に、この言説が差し向けられるものを変化させることを試みるよ

うな言説なのです。このことはわたしを本当に夢中にさせました。その当時、わたしは海洋検査官か森林官か俳優になりたかったのです。しかしサルトルを読んだことで、最終的に哲学に転向しました。

なにによって、つまりいかにしてわたしは、最初の師であったサルトルをこえて、わたしが受け取り、理解したような哲学を定義するのでしょうか。とはいえ、わたしはそのあとサルトルを捨てたわけではなく、端的に彼を超えて進み、別のことをやったのですが。しかし、哲学そのものはわたしにどのようなものと思われたのか。哲学の実在の正当性とはなにか。なぜ哲学は実在するのか。そしてわたしはなぜ哲学者であるのか。

哲学は実のところ、人間の活動から、普遍的価値をもちうる、あるいはもっているものを抜き出そうとします。わたしはそうであると思います——それが批判哲学や懐疑論的哲

---

(1)　「主体の実在」とは、l'existence du sujet であって、「主体の実存」のほうが実存主義の文脈においては自然な訳語である。しかし、後半の議論では、実存主義の意味での実存という意味ではほとんど用いられておらず、バディウ固有の語法を表すものとして「実在」と訳している。明らかに実存主義の文脈を参照しているときにのみ「実存」と訳すが、これらは同じ語彙であることに注意されたい。

学である場合でさえ、彼らはその問いに関して懐疑的なのです。つまり、それらの哲学は、この問いには答えられないと結論することができるわけです。しかしながら、それでもなおこれこそ彼らにとっての問いなのです。たとえば、懐疑論者は、われわれには真理を知ることはできないと言いますが、懐疑論者がそう言うのは、まさに懐疑論者が真理に関心をもっているからです。したがって、その問いこそが真理なのであって、その実存的なドラマは、真実を知ることはできないということであるわけですが、しかしなおそれはひとつの哲学的選択であるのです。哲学の全体がそういうものなのです。哲学は、人間の行為や、人間の思考、人間の創造において、伝達可能な価値や普遍的な価値をもつことのできるものすべてを扱うある種の中心なのであって、そこにはそのような価値は不可能である、あるいは困難であると結論付ける哲学をも含みます。それらもまた哲学の一部であるのは、それらが同じ問いを証言しているからです。これがわたしの考える哲学です。

結果的に、哲学の特徴とは、それがいかに伝達されるかにあるようにわたしには思われます。哲学の伝達は、たいへん重要な問いであって、それ自体が哲学の一部をなしており、哲学者たちによって議論されてきました。世の中には、この点について二つの道があると